

状況の「を」句文成立の意味的な制約について : 時間的状况における展開プロセス

著者	申 義植
雑誌名	筑波応用言語学研究
号	21
ページ	82-95
発行年	2014-12-20
その他のタイトル	On the Meaning Conditions in the Construction Formation of Situation-"o" Phrase : Development Process in Temporal Situation
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123589

状況の「を」 句文成立の意味的な制約について

－時間的状況における展開プロセス－

申 義植

キーワード：状況のヲ、時間的状況、展開プロセス

1. はじめに

日本語の格助詞「を」は、文法的・機能的な振る舞いにより（1）のように分けられる。本稿では、（1c）のような状況の「を」句文成立に関する意味的な制約を考察する。

- （1） a 太郎が皿を割った。 （対格の「を」）
b 太郎が公園を歩いた。 （移動格の「を」）
c 太郎が雨の中をさまよった。 （状況の「を」） （杉本 2009）

一般的に状況の「を」は、（2a）のように移動動詞と共起するものが多く見られるが、（2b）のように非移動動詞と共起する例も存在する。

- （2） a 雨の中をグラウンドを走った。 [空間的状況]
b 寒さの中を15分間立っていた。 [時間的状況]

ここで、まず、状況の「を」句を、共起する述語の移動性の有無に基づいて（2a）のように移動動詞¹と共起する「中を」句を空間的状況の「を」句として、（2b）のように非移動性述語と共起するものを時間的状況の「を」句として分けることを仮定する。考察の対象は、（2b）のように移動述語と共起しない時間的状況の「を」句に

¹ 本稿では、佐伯（2013）による移動動詞の規定に従う。佐伯（2013）では、「（a）格助詞へ/ニを伴う「行く、来る、帰る、戻る」など（b）格助詞ヲを伴い経路を表す「歩く」など（c）格助詞ヲを伴い経由点を表す「過ぎる」など（d）格助詞ヲを伴い起点を表す「離れる」など（e）格助詞ヲを伴い到達点を表す「訪れる」など（f）格助詞ニを伴い到達点を表す「着く」など（g）上記以上の移動の意味を含む動詞」のように移動動詞の規定が行われている。

限定して分析を行う。

本稿では、時間的状況の「を」において、「中を」句に後続事象の展開プロセス（以下、〔展開プロセス〕）という意味的な特徴の有無が、文成立の動機づけとして働いていることを主張する。また、状況「を」句における事象の特徴について、時間的状況が明確になる場合と後続事象〔展開プロセス〕との同時進行関係を検討し、時間的状況の「を」句文の特徴を明らかにする。

2. 先行研究

状況の「を」に関しては主に二つの先行研究が挙げられる。まず、杉本（1993）では格助詞「を」の文法的な用法に基づいて、(3)のように動詞の移動性という意味的な制約²がこの文で働いていることを指摘している。従って、状況の「を」は、何らかの移動を伴う動詞とだけ共起することにより、移動格の一種であると分析している。

(3) a *太郎は友人の制止の中を次郎を殴った。

b 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。 (杉本 1993)

一方、天野（2008, 2011）は、「ガ ヲ V」という枠を持つ構文的³な意味に基づいて「逆境－対抗動作性」の語用論的意味により、状況の「を」句文の許容度を判断している。この分析は、特に状況の「を」句が非移動動詞であり、意図的な行為を表す動詞と共起する場合に対して有効な説明を与えている。

(4) 社長退陣の怒号が響く中を、社長は練習通りに演説した。

＜逆境＞

＜対抗動作性＞

(天野 2011)

しかし、天野（2008, 2011）における一連の研究からの分析とは一致しない例も見つけられる。(5)のような文では、動詞の移動性も〔逆境－対抗動作性〕といった他動的な関係も読みにくい。

² 杉本（1993）では、「状況補語は、何らかの移動を伴う動作を表す動詞としか共起しない」としている。この種の動詞としては、「吹雪の中を山小屋を探した」における動詞「探す」も、移動動詞ではないが、何らかの移動を含んでいる動作として認められる。

³ 天野（2011）によると、「突破する」などの他動詞を述語とする他動構文型に基づいている。

(5) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子

<逆境?>

<対抗動作性?>

に振り返った。

(天使の自立 1996)

一方、移動性を含んでいない動詞と共起する状況の「を」句文について、杉本(2009)では、(6)と(7)における状況の「を」句と時間的な移動の「を」との類似性を取り上げ、状況の「を」が移動格の「を」の一種であると述べている。

(6) a ある峠でマイナス9度の中をトイレ休憩のために15分間立っていたが、...

b 値下げによる消耗戦や専門店の攻勢の中を生き抜くには、... (杉本 2009)

(7) a 楽しい時を過ごした。

b 激動の時代を生きた。 (杉本 2009)

状況の「を」と時間的な移動の「を」が同じものであるかは検討の余地があると思われるが、本稿ではこのような時間的な移動が「展開プロセス」に関係すると仮定して、この見方を手がかりにして時間的状況の「を」句の分析を行う。

3. 時間的状況の「を」句における「展開プロセス」

前述した例と同様に、(8) (9)の例文においては述語の移動性も、「逆境－対抗動作性」の関係も明確に読み取るのが難しい。

(8) ちょうど人が額に手をあてて遠くを眺めるといったふうに、淡い六日の月光の中を、向こうの谷をしげしげ見つめているのにあった。

(国語総合 2006)

(9) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に振り返った。

((5) の再掲)

(8) では「しげしげ」などの副詞成分が共起している点と「テイル」形になっている点、(9) では「平らげて」から「振り返った」までの動作が連続していることから、何らかの時間的な幅と流れの存在が想定される。佐伯(2013)でも、本動

詞・補助動詞「いる」と例外的に共起する状況の「を」句⁴は時間的な状況に視点が置かれていると述べている。

(10) 暑い中を扇風機も付けずにいた。/暑い中を水も飲まずにいた。

(11) こんな雨の中を彼はテントで一人眠っていたのだ。 (佐伯 2013)

時間的移動の「を」との類似性(杉本 2009)、時間的状況に関する指摘(佐伯 2013)に基づいて考えると、時間的状況の「を」句は後続事象との時間的な関係が問題になっていると考えられる。このような時間的関係がいかなるものであるかを考察するに先立って、宇都宮(1998)の指摘を検討したい。(12)のペアは「中」と「中を」形式の意味的な違いを示している。

(12) a 月も出ていない暗闇の中次郎がやってきた。

b 月も出ていない暗闇の中を次郎がやってきた。 (宇都宮 1998)

宇都宮(1998)の指摘によると、意味解釈として(12a)では、「次郎がやってきた」出来事が起こった状況が「暗闇の中」になっているが、(12b)では、「次郎がやってきた」出来事が「暗闇の中を」全体に渡って行われていることになる。つまり、(12b)における状況の「を」句は主語の時間的・空間的な経路のように解釈され・機能していることになる。このように「次郎がやってきた」という出来事の全過程が状況の「を」句に係わっていることに基づいて、(8) (9)における(後続事象)の[展開プロセス]も時間的な状況の「を」句との時間的な経路関係を持って解釈される可能性が考えられる。

また、森山(2008)でも、状況の「を」用法は、場所用法の「経路」が抽象化したものであり、「雨の中を敵と戦った」という文において「戦う」動作をプロセスとして把握し、そのプロセスの経路を表すと指摘している。

本稿では、このような特徴を「状況を経路としてとって、後続事象の展開プロセスが進行していくこと」と想定し、次節からは後続事象における[展開プロセス]という意味的な特徴が、①副詞成分との共起、②複数の動きの連続、③「テイル」形との共起、④プロセスが推測できる動きを持つ動詞によって言語化され、時間的状況の

⁴ 佐伯(2013)では、「～(の)中を」という形式として挙げられている。

「を」句文成立に関わっていることを検討していく。

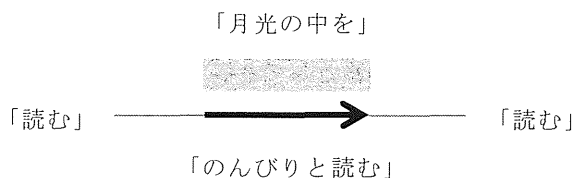
3.1 副詞成分により、[展開プロセス]が読み取られる場合

「読む」「書く」「弾く」「戦う」などの動詞は、継続的な動きを表すものである。行為が限界なく続くという点で時間的な幅は感じられるが、(13a)のように状況の「を」句との結びつきが難しい場合がある。従って、語彙的な時間の幅の存在（動作の継続）が[展開プロセス]読みにつながるとは言いにくいと思われる。

- (13) a *月光の中を本を読んだ。
b ?月光の中を本を読んでいた。
c 月光の中をのんびりと/必死に本を読んだ。

(13a)において、「月光の中を」句の状況と後続事象の「本を読んだ」という「スル」形との結びつきは、非文になっているが、(13b, c)の例では、「テイル」形式や様態副詞表現との共起で文法性が高くなっている。(13b)のように「テイル」形との共起は、文法性がある程度上がると思われるが、文法的な文になるまでには不十分である。ところが、(13c)における様態副詞表現は、仁田(2002: 36)での指摘のように「動きの展開過程の局面を取り上げ、それに内属する諸側面…中略…のありように言及することによって、事態の現実のされ方を限定し特徴づけているもの」になっている。つまり、「読む」のように継続的な動きであっても「スル」形によってひとまとまりの事象を表す場合には、様態副詞表現との共起により、その展開過程が読み取られるようになる。

- (14) 月光の中をのんびりと本を読んだ。



意味的には、「読むという行為において、特に「のんびりと読む」というプロセス

が「月光の中を」という状況で展開していく」のように解釈できると思われる。このように、継続的な動きを表す動詞の「スル」形が状況の「を」句が共起するためには「展開プロセス」を取り上げる副詞表現の助けが必要である。先行研究の例文にも、このように副詞成分が共起しているものがあり、副詞成分を取り外すと文法性が落ちることもある。

(15) a 防衛軍は、豪雨の中を最後まで戦った。 (天野 2011)

b ?防衛軍は、豪雨の中を戦った。

(16) a 社長退陣の怒号が響く中を、社長は練習通りに演説した。 (天野 2011)

b ?社長退陣の怒号が響く中を、社長は演説した。

3.2 複数の動きの連続で、「展開プロセス」が読み取られる場合

天野 (2011) は、比較的単純な動作を表す（更に「スル」形になっている）動詞と共起する例を取り上げて、これらの文の許容度が落ちる理由は「逆境－対抗動作性」といった語用論的な意味関係になっていないことによると指摘している。

(17) a ??そよ風の中を、ギターを弾いた。

b ??満天の星空の下を、座り込んだ。

c ??桜吹雪の中を、社長に帰国報告をした。

d ??穏やかな春の陽の中を、手紙を書いた。

e ??観衆の声援の中を、メダルに見入った。 (天野 2011)

しかし、このような動詞は、ひとまとまりの動きだけが現れているので、点的な事象になり、時間的状況の「を」との関係づけと「展開プロセス」読みが難しいと思われる。ここで、「展開プロセス」の意味を明示する方法として、順番で行われる動きを連続的につなげることが挙げられる。例えば、時間的な順番で行われる動作をつなげると文法性がだいぶよくなる。

(18) そよ風の中を、ビールを一杯飲んで（得意になって）ギターを弾いた。

（展開プロセス：ビールを飲む → ギターを弾く）

(19) 満天の星空の下を、空を見上げながら（べたりと）座り込んだ。

(展開プロセス：空を見上げる → 座り込む)

(20) 観衆の声援の中を、涙を流しながら (感動して) メダルに見入った。

(展開プロセス：涙を流す → メダルに見入る)

これらの例は、文の成立において「逆境－対抗動作性」が必須ではないことを示す。実例からも、2つ以上の動きが過程的に行われることにより、文が成り立っている例が確認できる。

(21) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。 (展開プロセス：平らげて → 反り返る)

(22) 伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立って焼香しはじめた。
(展開プロセス：たって → 焼香する) (虚航船団 1992)

(23) 母は生命の危機を感じて、とっさのことで着がえる暇もないので、酷寒のし
ばれる中を素足にねまき姿のまま、二軒続きの社宅の隣りの家の戸を叩いて
身をひそめました。 (展開プロセス：叩いて → ひそめる)
(フラッシュバック 2001)

特に (21～22) の例における状況の「を」句は、文脈により「逆境」と認められにくいものであり、状況全体において複数の動きが一連のプロセスを持って行われる解釈になっている。

3.3 「テイル」形と共起する場合

3.1節で指摘したように、状況の「を」句は「テイル」形と共起すると、(24b)のように文法性がある程度上がる場合がある。

- (24) a *月光の中を本を読んだ。
b ?月光の中を本を読んでいた。

(24b) では、様態副詞などの助けがないので、その「読む」行為の展開過程まで

捉えるのは難しいと思われるが、「テイル」形によってひとまとまりの（点的な）事象が幅のある（線的）事象として捉えられる。後続事象が「テイル」形により、線的に捉えられると、[展開プロセス]までは読み取られないが、時間的状況の「を」句との時間的な関係づけが容易になるのではないか⁵。更に、(25c)のように「楽しそうに」などの副詞と共起するとより自然になることは3.1節で述べた通りである。

(25) a ??そよ風の中を、ギターを弾いた。

b ?そよ風の中を、ギターを弾いていた。

c そよ風の中を、楽しそうにギターを弾いていた。

「テイル」文にはそれぞれのアスペクトの意味（進行、結果、経験）があるが、時間的状況の「を」句と共起する場合は、特に「進行」の意味として解釈される。例えば、「生まれる」は状態変化動詞であり、「テイル」形により結果残存の解釈になるのが一般的である。

(26) 太郎と花子との間に子供が生まれている。

しかし、(27)のように時間的状況の「を」句文と「テイル」形が「進行」として解釈できる文脈の助けがあれば、「生まれる」における[展開プロセス]が読み取られる可能性も高くなる。（様態副詞などの助けがあると更によくなる。）

(27) a #激しい時代の中を、太郎の息子が生まれていた。

b その時、家族の皆が見守る中を、太郎の息子が（勢いよく）生まれていた。

このように、時間的状況の「を」句と「テイル」形の共起により、特に後続する事象が線的に捉えられることは、状況句の（幅のある）事象との結びつきが容易になり、[展開プロセス]が読み取られやすいきっかけを与える。これは、本動詞・補助動詞「いる」と共起する状況の「を」句が時間的状況に視点が置かれるとする佐伯（201

⁵ 本稿では、時間的状況の「を」句が表す事象にも時間的な幅があるとして、状況句の事象と後続事象が時間的に「同時進行」であることを主張する。詳しくは4節で説明する。

3) の主張とも一致する面でもある。

3.4 語彙的な意味により「展開プロセス」が読み取られる場合

今まで検討してきた「展開プロセス」は、主に動詞句において副詞成分・複数の動きの連続・「テイル」形などの助けにより読み取られることが多かった。一方、次の動詞「点検作業する」は、今までの例とは違ってこれらの助け無しで文が成立している。

(28) ガス会社の職員は、吹雪の中を点検作業した。(天野 2011)

これは、後続する出来事において「展開プロセス」がどのように読み取られるかに関係している。例えば、「ガス会社の職員が … 点検作業する」と「太郎が … 路上作業する」とはその内容において違いがある。(29) のような文は、「路上作業する」内容・範囲が不明であり、その過程も推測できないので文法性が落ちる。一方(28) では、作業の範囲と過程がある程度推測できる内容になっているので、言えるのではないかな。

(29) ?太郎は、吹雪の中を路上作業した。(作業のプロセスが不明)

また、次のように「済ませる」「生まれる」のように状態変化を表す動詞も、副詞的な表現無しで状況の「を」句文が成立する。

(30) 大雨の中を、太郎は故障部品の交換を済ませた。(天野 2011)

(31) 激しい戦乱の嵐の中を、王の世継ぎが生まれた。

(30) (31) においては、動詞の語彙の意味が「完了する、結果物を出す」のようになり、自然に完了への「展開プロセス」が推測できる。この予測が正しいとすれば、時間的状況の「を」句文と(他の言語的な手段無しで)共起する動詞は、何らかのプロセスが推測できる動きを持つ動詞である必要があることになる。こう考えると、(32) の「達成する」は「何らかの結果物を出す」あるいは「何らかの目標に到達する」までのプロセスが推測できると思われる。

(32) 営業部は長期間円安が続く中を、（2年連続で）売り上げ目標を達成した。

実は、(32) も「2年連続で」のような副詞的な表現により更に文法性が上がり、
(28) (30) (31) の例も同様である。

(28') ガス会社の職員は、吹雪の中を（巧みに）点検作業した。

(30') 大雨の中を、太郎は故障部品の交換を（迅速に）済ませた。

(31') 激しい戦乱の嵐の中を、王の世継ぎが（遂に）生まれた。

副詞表現による展開過程の取り上げは、3.1での指摘のように単純な動きを持つ動詞の展開過程を取り上げる上で、既にプロセスの意味が想定できる動詞においても「展開プロセス」読みを更に明確にするとと思われる。

3.5 まとめ

以上、状況の「を」句文成立においては文中の「展開プロセス」が読み取られる必要があり、「展開プロセス」の意味にかかわる様々な言語的な特徴を検討した。まとめると、(33) のようである。

(33) 「展開プロセス」の意味を明示する言語的な特徴

a 様態副詞との共起する場合

－効果：継続的な動きを持つ動詞の展開過程が取り上げられる

b 複数の動きの連続の場合

－効果：2つの動作が一連のプロセスを持って展開される

c 後続する事象が「テイル」形になっている場合

－効果：事象が線的に捉えられて、時間的狀況と結びつきやすくなる

d 述語の語彙的な意味として「完了、結果物を出す」を持っている場合

－効果：完了までのプロセスが容易に推測できる

4. 時間的狀況の「を」句における事象の特徴について

最後に、時間的狀況の「を」句における事象について検討する。本稿の1節では、

〔空間的状況〕〔時間的状況〕の区分を、共起する述語の移動性の有無に基づいて分けたが、従来の分析⁶によると、状況句は基本的に時間・空間を併せ持つ構成になっている。先行研究での指摘のように、状況の「を」句は空間的状況・時間的状況としてきれいに分けられるものではないと思われるが、時間的状況の「を」句文においては、〔展開プロセス〕の言語化に伴って状況句の方にも時間的状況であることが明確に明示される必要がある。状況句における事象の特徴は、「中を」に前接する要素から読み取られる。一般的に「～（の）中を」という形式をとる状況の「を」句は、できごと名詞⁷・できごと節が前接する。

(34) {雨/吹雪/嵐}の中を、走った。

(35) {雨が降る/酷寒のしばれる}中を、15分間待っていた。

加藤（2006）では、状況補語「中を」にはできごと性のある名詞・できごと性のある節が前接する必要があると述べられている。（36b）のように「凍った雪の中を」という表現は場所解釈になる。

(36) a 吹き付ける雪の中をひと気のない一本道を進んでいった。

b *凍った雪の中を、事前に決めておいたルートを進んだ。（加藤 2006）

「中を」に前接するできごと節がル形になっていることは、状況句の方にも（できごとの進行）線的な時間として捉えられることが分かる。（36）は空間的状況の例であるが、時間的状況の「を」と共起する例も、（37a）のようにできごと節がル形になっていなければならない。

(37) a 現金と女色が飛び交い、権謀術策が渦巻く中を生きて来た経験が、いま

⁶ 宇都宮（1998）では、「（の）中」に前接する出来事句が移動空間・移動時間の両方の意味から構成されていると指摘し、佐伯（2013）でも、「～（の）中」「～（の）中を」が空間的状況と時間的状況が密接に関係していると述べられている。

⁷ 影山（2010）では、名詞の中の出来事性を捉えるために、名詞の中で存在する語彙的なアスペクトを検討し、分析を行っている。この中でも語彙的なアスペクトを有して、時間的展開を含む名詞群を次のように提示している。特に継続的なアスペクトを持つ名詞群を取り上げる。

i) 継続的なアスペクトを持つ名詞

三日間の {国際会議/遠足/不在/晴天}

五年間の {不況/内縁関係/圧政/冷戦}

（影山 2010）

になってモノを言う、やはり“夜の悪党”としてしか三崎は生きられないのかもしれない。(夜の総務探偵 2001)

b ??権謀術策が渦巻いた中を生きて来た。

一方、移動述語と共に起る空間的状况では、(38)のように状態を表す「タ」形も用いられるが、時間的状况の実例はないようである。

(38) 埃が薄れた中を、味方鉄砲隊は陣地を捨て算を乱して退却を始めている。
(物見隊顛末 1994)

また、次の(39) (40)の例において、「嵐」「雑踏」はできごと名詞ではあるが、「嵐の中を」「雑踏の中を」においては、空間的な状况の方が際立っているとように見えるので、後続する事態(動詞)に移動性がないと許容度が落ちる。

(39) ??嵐の中を王の世継ぎが生まれた。⁸ (天野 2013)

(40) *その男は雑踏の中を突然叫び声をあげた。(杉本 1986)

これらの文に対して、状况の「を」句に「激しい戦乱の」「人々が家路を急ぐ新宿駅の」などの修飾が付加すると文法性が上がる。

(41) 激しい戦乱の嵐の中を、王の世継ぎが生まれた。((31) 再掲)

(42) その男は人々が家路を急ぐ新宿駅の雑踏の中を狂ったように叫び声をあげた。

「嵐」「雑踏」は(時間的な要素を含んでいる)できごと名詞ではあるが、「激しい戦乱」「人々が家路を急ぐ」などのできごとにより更に時間的な状况が際立ち、状况句における事象が進行中であることが分かりやすくなる。すると、後続事態の[展開プロセス]読みが持っている時間的な幅と自然に結び付けられるようになると思われる。现阶段の予測として、状况句と後続事象が持つ時間的な関係は(43)のように同時進行関係であると考えられる。

⁸ 「生まれる」は、前述したように何らかのプロセスが想定される動きを持つ動詞であるが、この動詞だけでは、[展開プロセス]が読み取りにくいところがある。更なる検討が必要である。

(43) 権謀術策が渦巻く中を → [時間的狀況]
 (必死に) 生きた → [展開プロセス] [* → は時間の流れ]

以上、時間的狀況の「を」句における事象の特徴を観察したが、この特徴が「展開プロセス」の読みにどのように関係するかは更に検討が必要である。

5. まとめと今後の課題

時間的狀況の「を」句文成立の動機づけは、出来事における「展開プロセス」の意味が読み取られるかによる。「展開プロセス」は、①副詞成分との共起、②複数の動きの連続、③「テイル」形との共起、④プロセスが推測できる動きを持つ動詞などにより言語化され、文成立の動機づけとして働いている。また、狀況の「を」句において、後続事象との「同時進行」という時間的關係が捉えられやすい事象の特徴（できごと節のル形の前接、時間的狀況を際立たせる修飾の付加）があり、それが「展開プロセス」と結びつくことを観察した。時間的な狀況はこのような意味的な特徴により、文が成立すると思われるが、狀況において時間的・空間的狀況がどのように分けられているかは更なる検討が必要である。更に「～中を」形式と移動格の「を」との異同も今後明らかにしたい。

【参考文献】

- 天野みどり(2008)「狀況のヲ句について」『和光大学表現学部紀要』8,和光大学,pp.1-13.
 天野みどり(2011)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
 今仁生美・今仁生美(2000)『意味と文脈』岩波書店
 宇都宮裕章(1998)「ヲ格の境界性―「範囲」を定める格としての認定―」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)第48号』静岡大学教育学部,pp.17-32.
 影山太郎(2010)「動詞の文法から名詞の文法へ」『日本語学』29-11,明治書院,pp.16-23.
 加藤重広(2006)「対象格と場所格の連続性―格助詞試論(2)―」『北海道大学文学研究科紀要』118,北海道大学,pp.135-182.
 佐伯暁子(2013)「現代語における狀況を表す「～(の)中を」「～(の)中〇」について」『日本語文法』13-2,くろしお出版,pp.54-70.
 杉本武(1986)「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武著『いわゆる日本語助詞の研究』

にほんごの凡人社

杉本武(1993)「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会篇)』
6,九州工業大学,pp.25-37.

杉本武(2009)「格助詞『を』再考」韓国日語日文学会『日語日文學研究』第71輯1巻,ジェ
イアンシー,pp.3-12.

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版

松井夏津紀・影山太郎(2009)「第8章 副詞と二次述語」影山太郎編『日英対照 形容詞・
副詞の意味と構文』大修館書店,pp.260-292.

三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実編『ヴォイスとアスペクト』研究社出版,
pp.108-186.

森山新(2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かす
ために—』ひつじ書房

【用例出典】

KOTONOH「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中納言 <http://chunagon.ninjal.ac.jp/>